

千里キリスト教会 主日礼拝説教

日 時 2017年07月16日

聖書箇所 Iテサロニケ02:13~16

説教主題 「生きて働く神のことば」

説教者 徳本 篤

序 論)

先週はテサロニケ 2 章前半で、神のことばは話し手と聞き手との信頼関係からなるコミュニケーションを媒体として心から心へと伝えられたことを学びました。今日の個所では、神のことばはそれを受入れた人のうちでどのような働きをするかということに注目したいと思います。

本 論)

さて、2 章 13 節でパウロはいきなり「神のことば」とは言わず、「神の使信のことば」と語っていますが、それはなぜでしょうか。それはパウロが伝えた福音がパウロ自身から発信されたのではないこと、すなわち、福音の発信者が神であり、パウロは神からの信託を受けて、それを異邦人に伝える使者であるという立場を強調しています。この背景には、パウロの宣教の働きに反対する偽教師たちが、パウロの伝えた福音がパウロ個人から出たものであり、あくまでも彼の個人的な見解に過ぎないと語っていたからです。とくに割礼派のユダヤ人の教師や異端の教師たちは常にこの考えを盾にして、自分たちの教えの正統性を強く主張していました。では、パウロが伝えた神からの使信のことばが本物であるという証拠は何でしょうか。それは神のことばとして受け入れた人々のうちに、神のことばが生きて働いていることだとパウロは言います。

パウロは自分が伝えた神からの使信のことばを、テサロニケの人々が神のことばとして受け入れてくれたことを、絶えず神に感謝していると語っています。パウロをそれほど喜ばせているのは、ただ受け入れただけでなく、神のことばがテサロニケの人々のうちに働いて、彼らがユダヤのキリスト・イエスにある神の諸教会にならう者となったことです。

ユダヤの諸教会は、キリストに反対するユダヤ人からの厳しい扱いを受けていました。彼らはそのような状況の中でもイエス・キリストに対する信仰を大切に守り、キリストに従う生活を追い求めました。神のことばが彼らのうちに働いていたからです。

同じように、テサロニケの教会も、キリストに反対する同国民からの厳しい扱いを受けていました。それを心配したパウロはテモテをテサロニケに派遣したのですが、テモテからの報告では、テサロニケの教会がユダヤの神の諸教会にならって、イエス・キリストに対する信仰を大切に守り、キリストに従う生活を追い求めていることでした。この知らせは宣教者であるパウロをどれほどの感謝の気持ちにさせたか計り知れません。

「ならう者」と訳されるミメーテースは先の者の足あとに沿ってその後についていくことをあらわします。その関係性から「ならう者」は、キリストのからだとして、両者の一体性と信頼の強さをあらわすものとして語られるようになりました。その事例にエペソ 5:1 を挙げることができます。「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。」最初の原型はイエス・キリストです、それにならったのが使徒たちでした。使徒たちにならったのはエルサレム教会を初穂とするユダヤにある神の諸教会でした。さらに使徒たちの働きによって次々に誕生した多くの異邦人教会も、ユダヤにある神の諸教会にならったことが思い浮かびます。

したがって、神のことが生きて働くというのは、個人的な能力や、奇跡的な力や、不思議なしるしとしてあらわれるものではなく、それを受入れた人々のうちにキリストを原型としてそれにならう者の集団を形成する力、一つのからだとして互いを結び合わせさせる力としてあらわれることが明らかになりました。

応 答)

ユダヤのイエス・キリストにある諸教会とテサロニケ教会とを一つに結び付けたものは、人間的な能力や組織の権威や優れた伝統の力ではありませんでした。イエス・キリストが最高の存在であり、イエス・キリストによって明らかにされた神のことがこそが永遠に残る財産であることを確信して受け入れたことでした。

私たちが 21 世紀の日本というこの国において、キリストのからだとして一つに結び合わされたこと、聖徒たちの交わりに加えられたことは事実です。そのことが自分にとってどんな意味があるのでしょうか。自己満足によって怠慢にならず、自己過信によって高慢にならず、自分たちには神の諸教会にならうべきことがなお多くあることを覚えて、日々謙虚に信仰を守り、ひたすら前に向かって進むことを追い求めていきましょう。